

心と対話する村、 ゲーテアムム

建築家
連 健夫

ルドルフ・シュタイナー設計のゲーテアムム村は、スイスのバーゼル市から南に10キロのドルナッハ市にある。この村にある住宅や劇場は、いずれも彫塑的で独特な外観を持っており、最初は度胆を抜かれるが、時間がたち、慣れてくると不思議と落ち着いた気持ちになり、またワクワクするような気分さえしてくる。

ルドルフ・シュタイナー(1861~1925)は建築家というよりは、むしろ神秘主義思想家、教育者、哲学者、文学者、演出家として一般的に知られている。特に彼が独自に切り開いた「人智学」という世界観に基づくシュタイナー学校では、児童の個性を重視し、芸術を教育の中心に据えたユニークな教育が行われており、その知育に偏らない自由な教育環境は、多くの賛同者を生み、現在まで世界中に百校を超えている。ゲーテアムム村はこの「人智学」に基づく表現の場としての劇場、会合施設を中心として、住宅や人智学協会の事務所、暖房設備棟などによって構成される。

この村の建設には多くの苦難があった。特殊な建物であったため用地はなかなか見つからなかった。しかし彼の理論に賛同した大地主、ドルディック氏が土地を提供してくれた。更に設計にも困難が伴った。というのは、シュタイナーは53歳のこの時まで建築の経験は全くなかったのである。彼は人智学の思想に基づき多くのスケッチを描いた。これを協力設計者と工務店による努力によってようやく具現化された。しかし、中心施設である劇場は工事完成直前に彼の考えに反対する何者かによって放火されすべて焼失してしまったのである。シュタイナーはこれにもくじけず、更に発展したすばらしい新案を示し、ようやく1928年に完成となった。

彼は建設後にこう述べている。「理論を芸術に変換する作業は、まさしく私自身の心の体験であった。その体験を通じて心で感じられる芸術的な空間造りを目指した」。つまり彼にとっての建築空間・街並みとは芸術と精神との媒介であったのである。ここを訪れる人は年間数千人にのぼり、それぞれの思いを持ってこの建築空間・街並みを体験するわけである。私自身は、彼の理念を深く理解できようもないが、なぜか、これこそが心の中にある創造性と対話する建築空間であると強く感じたのである。

ゲーテアムム空間を通じて、「創造性」や「癒し」といった心と対話する建築づくり、街並みづくりの大切さを改めて感じるのである。



連 健夫
(むらじ たけお)
建築家、(有)連健夫建築研究室主宰、多摩美術大学、東京電機大学非常勤講師。
1956年京都市生まれ、多摩美術大学卒業、東京都立大学大学院修了、建設会社設計部勤務の後、91年渡米、AAスクール入学、AA大学院建築等学位取得の後、同校助手、東ロンドン大学非常勤講師を経て96年帰国、現在に至る。
作品：HIS (UK) Ltd、プレグンス邸など。
著書：『イギリス色の顔』(技報堂出版)、『学校建築海外事例集』(共著、朝日社)、『高齢者施設の新空間マニュアル』(共著、中央法規)など。